

奈良県宇陀地方の中世墓地

白石太一郎

はじめに

- 一 発掘された宇陀の中世墓地
- 二 発掘された中世墓地の性格
- 三 現在まで存続する中世墓地
- 四 中世宇陀における葬・墓制の展開

論文要旨

奈良盆地の東南の山間部に位置する宇陀地方の中世墓地については、最近の発掘調査によってその全容が明らかにされた例がいくつかある。それら中世末に廃絶し、遺跡化した墓地に対しても、この地方には中世以来現在までその利用が続いている墓地がある。小論はこの両者を総合して考察することによって、中世の宇陀における葬制と墓制の展開過程を追求しようとしたものである。

発掘された中世墓地はいずれも三〇基程度から九〇基程度の墓で構成されるもので、地上には石組をもち、多くはその上に五輪塔や箱形の石仏などの石塔類を立てていたらしい。またそれらの地下には、火葬骨を納めた火葬墓、火葬施設、土葬墓などがみられる。それらは一三世紀頃から一六世紀頃まで存続したもので、一五世紀以前には火葬墓が多く、それ以降には土葬墓が多くなる。また石塔類が多く立てられるのも一五世紀以後のようで、一六世紀前半までは五輪塔が、一六世紀後半には箱形石仏が用いられたらしい。一方現在まで続く墓地のなかにも多数の中世の石塔が遺存するものがあり、中世の段階では発掘

された墓地と同様の景観・内容・性格をもっていたと考えられる。

こうした宇陀の中世墓地は、いざれもこの地域の在地武士や有力農民の一統墓と考えられる。彼らが一三世紀頃になってこうした火葬墓地を営むようになる背景には、おそらく律宗などの下層僧侶の積極的な働きかけがあつたのであろう。やがてこれらの墓地は次第に土葬の墓地に変化するが、さらに一六世紀後半になつて織豊政権による支配秩序の変革が行われると、主として在地武士層により形成されていたこの地の中世墓地は大きな転機を迎える。その多くは廃絶して新しく成立した村の共同墓地に統合されたり、一部は地域の民衆墓とも含み込んだ地縁的な村墓に変質する。血縁関係を紐帶とする墓地から地縁関係を紐帶とする墓地に変化するのである。こうした墓地の再編成とともに葬・墓制自体も大きく変化する。それは村単位の埋め墓とは別に多くは家単位の詣り墓を営む両墓制の成立である。その成立の契機は、村を単位に行われる遺骸の処理と、家を単位に行われる祖先祭祀の矛盾の解消にあつたと思われる。